

庾信の北周の宗教政策への対応と趙王との関係

矢嶋美都子

はじめに

北周の諸王子の中でとりわけ庾信の影響を受けたとされる趙王の約十編の文章が、聖武天皇宸翰『雑集』（六朝から唐代の仏教関連の漢詩文集）に周趙王集として収録されており、その文章には、単語レベルのみならず句造りにも庾信の影響が見られることから、つまり趙王は仏教の影響を庾信から受けたのではないか、という研究発表があった。^① 趙王の作品は「従軍行」（七言四句）一首しか残っておらず、その本伝（『周書』卷十三）に、

趙僭王招、字豆盧突。幼聰穎、博涉群書、好屬文。學庾信體、詞多輕艷。招所著文集十卷、行於世。

とあっても趙王の文学について検証の手立てが無かった。その点から見ると、日本にしか残っていない聖武天皇宸翰『雑集』周趙王集に着目して、趙王の文章の修辭に於ける庾信の影響を検証した功績は大きい。ただ、それをもって趙王は仏教の影響を庾信から受けた、という方向で思考するのは如何なものかと思われる。^② そこで、本稿では、庾信と趙王の関係を次の二点から考察し整理しておこうと思う。第一は当時の北周の文化的特に思想的な状況とそれに対する庾信の立場、対応について、第二は庾信と趙王との関係、つまり庾信の趙王に対する認識、

対応についてである。

一、北周の文化・思想状況と庾信の立場

庾信(五一三〜五八一)は梁朝から西魏へ使者として赴き(五五四年)、その直後に西魏が梁朝を滅ぼしたので、そのまま北地に止められ、西魏とその譲りを受けた北周に仕え、その後半生の殆どを北周で過ごした。北周では王褒とともに文学の臣として他の文人の及ぶ者の無いほど特別に優遇された。

世宗、高祖竝雅好文学、信特蒙恩礼。至趙、滕諸王、周旋款至、有若布衣之交。群公碑誌、多相請託。唯王褒頗与信相埒、自余文人、莫有逮者(『周書』卷四一庾信伝)。

この記事の実態については已に詳述してあるので繰り返さないが、庾信が梁朝時代に得ていた文学の高い名声を価値のあるものとして認め、王朝の権威を示すために宮廷詩人的な役割を期待しての優遇なのである。優遇されても庾信が晩年までも北朝(西魏・北周)の囚われの臣下と自覚していたことは晩年の作品からも明らかである。西魏の譲りを受けたばかりの北周は国造りに忙しく、やがて北斉を平らげ、陳朝、後梁をも併呑してゆく軍事国家であるから

後周草創、干戈不戢、君臣戮力、專事經營、風流文雅、我則未暇。

〔後周(北周)草創、干戈戢まず、君臣力を戮して、専ら經營を事とす、風流文雅、我なれば則ち未だ暇あらず〕(『隋書』卷三五經籍・四)

といった状況であり、北地であるから自然環境も厳しく早魃も何回かあり、天文学や医学、兵学といった実学が尊重される風潮であった。従って思想、宗教に対する北周・武帝の政策もその治世の後半には厳しさを増した。

『周書』武帝紀に拠つてその様子を窺うと以下のように段階を踏んで仏教、道教を禁止・廃絶している。⁽⁵⁾『周書』武帝紀

天和元年五月 帝御正式殿、集群臣親講礼記。

天和三年八月 帝御大德殿、集百僚及沙門、道士等親講礼記。

天和四年二月 帝御大德殿、集百僚及沙門、道士等討論积老義。建德元年正月帝幸玄都觀、親御法座講

說、公卿道俗論難、事畢遷宮。

十二月 幸道会苑、以上善殿壯麗、遂焚之。

建德二年十二月 集群臣及沙門、道士等、帝升高座、辨积三教先後、以儒教為先、道教為次、仏教為後。

建德三年五月 初断仏道二教、経像悉毀、罷沙門、道士、並令還民。並禁諸淫祀礼典不載者尽除之。

この記事から北周の基本方針が窺えるのだが、先ず武帝は群臣を集めて『礼記』を講じている。更に「百僚及沙門、道士等」を集めて『礼記』を講じている。これは宇文泰が官制改革をする時、「魏恭帝三年、春正月丁丑、初行周礼、建六官」(『周書』文帝紀)とあるように、『周礼』(古代の周の官制を記録してある)を手本にしたことに倣うもので、北周は古代の周を理想とする国家であることを改めて知らしめた、といえよう。そして天和四年に、官僚達と仏教、道教の関係者を集めて各々の教義を討論させ、建德二年に儒教を第一に置き、道教をその次、仏教をその次とランクづけをして、翌年、建德三年五月には遂に仏・道二教を禁止・廃絶する。この間、宮廷詩人である庾信はどのように関わっていたかという点、武帝の詔に応じた「奉和闡弘二教応詔」詩が残っている。倪注に『周書』武帝紀「天和四年二月帝御大德殿、…」とある。

五明教已設 五明の教え已に設けられ

三元法復開

三元の法 復た開かる

魚山將鶴嶺

魚山と鶴嶺と

清梵両辺来

清梵 両辺より来たる

香煙聚為塔

香煙聚まりて塔を為し

花雨積成台

花雨積もりて台を成す

空心論仏性

空心もて仏性を論じ

貞氣辨仙才

貞氣もて仙才を辨ず

露盤高掌滴

露盤高くして掌滴らし

風鳥平翅廻

風鳥平らかに翅廻る

無勞問待詔

待詔に問うを勞する無く

自識昆明灰

自から昆明の灰を識るらん

二句一対で仏教・道教に関する語や典故を相互に織り込み、この討論集会の盛会の様子を詠じたもの。「魚山將鶴嶺、清梵両辺来」の句は、仏教の清梵は魚山から、道教の清梵は鶴嶺から響いて来るようだ、という。魚山と鶴嶺は倪注に

魚山、謂釈、鶴嶺、謂道。言此二教清梵從両辺来也。

とある。魚山は倪注では『異苑』を引く

陳思王曹植、字子建。嘗臨魚山、忽開巖岫裏有誦經声、清適深亮、不覺斂襟祇敬、便則而效之。今之梵唱、皆植依擬所造。

鶴嶺の倪注は『予章記』を引き、仙人・王子喬が鶴に乗って行った所という。最後の二句は、東方朔（待詔）が漢の武帝に昆明池から見付かった黒土を何かと問われ、西域人が知ってるからと、西域人に問い「劫灰（世界尽滅の時に起こる大火の灰）」の答を得た故事を踏まえる。この集会では待詔（東方朔）を勞する必要も無く、「昆明灰」のようなことも自然と知ることが出来ます、と北周・武帝の仏教・道教に対する知識・見識の広さを賞賛し、同時にこの会に集められた「百僚及沙門、道士等」達の学識も賞賛する結び。庾信の宮廷詩人的立場からいえば、こういった儀礼的な作品では当然だが、仏教・道教のいずれにも荷担しない距離を保持し、会の盛大さを美しく詠じることに終始していることが窺える。「奉和闡弘二教応詔」詩は、『周礼』を講じて周をお手本につまり儒教を国造りの基本にする事を既に示している北周・武帝の詔に応じた作品であるから、或る種思想調査、踏み絵の意味も意識せざるをえない状況下の作とも言える。こう考えると、「昆明灰」の典故は、制作年代が特定出来ないのだが「哀江南賦」で梁・武帝が仏教を崇拜し仏理の講釈に熱心だった事を述べる部分でも

談劫燼之灰飛、劫燼の灰の飛ぶを談じ、

辦常星之夜落、常星の夜落つるを辦ず

と使っており、仏教を禁止しようとしていた北周・武帝の意を汲んで、仏教に熱心になる例は殷鑑遠からずと、遠回しに仏教崇拜に釘を刺した趣がある、更にいえば北周・武帝の政策方針に対する容認、肯定の態度表明とも読み得る。なお常星の句は釈迦が生まれる時に恒星が落ちたという故事。建徳元年正月の集会に於いても、庾信は北周・武帝の詔に応じて、「奉和法筵応詔」詩を作っている。倪注は『周書』武帝紀「建徳元年正月帝幸玄都觀……」を引く。

…十四句省略…

建始移交讓 建始に交讓を移し

徽音種合昏 徽音に合昏を種ゆ

風飛扇天辯 風飛び天辯を扇ぎ

泉湧属糸言 泉湧いて糸言を属す

羈臣從散木 羈臣 散木に従う

何以預中天 何を以て中天に預からん

□□遙可望 □□遙かに望むべし

終類仰鵲絃 終に鵲絃を仰ぐに類す

この詩の省略した十四句は仏教・道教に関する語や典故を用いての玄都觀の美しい描写。建始は魏の曹操が洛陽に建てた宮殿の名。交讓は樹木の名。「蜀都賦」に「交讓所植」とあり、李善注に「両樹対生、一樹枯則一樹生、如是歳更、終不俱生俱枯也：」とある。徽音も洛陽にある宮殿の名。合昏は倪注に抛れば榿。周処「風土記」の「合昏、榿也。葉晨舒而昏合」を引く。建始も徽音も玄都觀を例える。天辯も糸言も詔を下すこと。最後の四句は二字缺字があるので正確を欠くが、羈旅の臣である自分は散木の如き者だから、中天台のような立派な席にどうしてかわることが出来ましようか、立派な席に出されても結局は鵲絃を仰ぐようなものです、という。散木は神木として祭られて、大きい姿で長生きしているが、何の役にも立たない無用の木（『莊子』内篇・人間世・匠石爰社問答）。中天は周の穆王が築いた高さ千仞もあるという中天台。玄都觀での法筵をいう。ここからも、庾信が集会の盛大さ北周・武帝の立派さを仏教と道教に関連する用語、典故を同等の程度で用いて賞賛するばかりで、仏教と道教のどちらにも組みせず距離を保持していることが分かる。さらにこの詩では、「散木」のような自分はこ

の立派な場に居るのに相応しい者ではない、とひたすら卑下、謙遜、恐懼し、こういった論争の場から遠ざかるうとする庾信の保身ともいえる対応も窺える。

庾信には北周・武帝への応詔の作品が先の二首の他に「從駕觀講武」「至老子廟応詔」「詠春近余雪応詔」「行途賦得四更応詔」「奉和平鄴応詔」「喜晴応詔勅自疏韻」の六首がある。この中で思想的に関係がありそうな作品は「至老子廟応詔」だが、この詩でも老子に関する典故を用いて老子或は老子廟のことを詠じるに止まる。なお庾信には制作年代が特定出来ないが「道士歩虚詞」十首があり、いずれも伝説や『列仙伝』、『神仙伝』に記載されている仙人のことをそれに相応しい典故を多用して詠じている。道教或は老莊思想の雰囲気が詩題からでも窺われる作品はこの他に「遊仙」(一本に「遊山」)、「奉報窮秋寄隱士」、「奉和趙王遊仙」、「奉和趙王隱士」、「入道士館」
「仙山」二首等である。一方、仏教の雰囲気を伝える作品は「和從駕登雲居寺塔」(一本に「和趙王遊雲居寺」)、在梁時代の作には「奉和同泰寺浮屠」(倪注に「和簡文帝也」とある)。なお法師は一般には仏教の僧侶をいうが道教の道士もいう場合もあり判然としないのだが「送靈法師葬」、「和靈法師遊昆明池」二首、「和侃法師三絶」の作品もあり、法師との交際があつたことも窺える。これらの作品からも庾信がどちらかといえば道教或は老莊思想に関する用語、雰囲気を多用し、興味を示す傾向が見て取れる。趙王に關係した作品でも仏教に関するものは「和從駕登雲居寺塔」(一本に「和趙王遊雲居寺」)一首である。雲居寺やその塔を情景描写し最後に

平時欣侍從 平時 侍從を欣び

於此暫徘徊 此に於いて暫らく徘徊す

と結ぶ。平和で何事もない時に趙王様のおそば近くにお仕えできて嬉しい、というだけで仏教については言及していない。また「秦州天水郡麦積崖仏龕銘」、「陝州弘農郡五張寺經藏碑」があるが、これは庾信本伝に「群公碑

誌、多相請託」とあることから名文章家として頼まれて書いた作品の中の二本と見るべきと思われる。

以上、当時の北周・武帝の宗教対策の流れと庾信の作品の傾向から、庾信は仏教にも道教或は老荘思想にも相
当の知識・教養があるとは窺えるが、信仰、崇拜、傾倒していることは読み取れない。ただ詠じる機会が与えら
れれば、作品のテーマに合わせて特別にどちらかに荷担すること無くバランスよく距離を置き、その知識を披露、
披瀝してみせていた、といえるのではないかと思われる。北周の宮廷詩人的立場にあつた庾信としては当然の表
現態度といえよう。また、傾向としては道教或は老荘思想に関する作品が多いが、これは優遇されているとはい
え囚われの臣下である庾信の複雑な立場、隠逸を許さない北周の政策（『周書』には隠逸伝はない）等を勘案すれ
ば、庾信には政治的な野心が無く、隠逸志向が有ると示し続ける必要があつたからと思われる。従つて、庾信が
趙王に仏教の影響を与えた、或はそのような意図があつたとは殆ど考えられないのである。さて、それならば庾
信は趙王に対してどのような対応をしていたのか、次に考察する。

二 庾信の趙王に対する見方

庾信の趙王に関する作品は、一でも挙げた作品を含めて詩が十九首、「奉報窮秋寄隱士」「上益州上柱国趙王」「二
首」「奉報趙王出師在道賜詩」「和趙王送峽中軍」「奉和趙王途中五韻」「奉和趙王遊仙」「奉和趙王隱士」「奉和趙王
美人春日」「奉和趙王春日」「北園新齋成応趙王教」「奉報趙王惠酒」「奉和趙王喜雨」「奉和趙王西京路春日」「和
趙王看伎」「正旦蒙趙王賚酒」「奉和趙王」「和趙王看妓」「和從駕登雲居寺塔」、啓が十一篇、全て何かを賜つた
（新詩、絲布等、米、乾魚、馬、猪、雉等）お礼の啓。趙王の夫人の墓誌銘が一篇「周趙国夫人紇豆陵氏墓誌銘」、
趙王の作品集の序が一篇「趙国公集序」。趙王と庾信の関係を考察するに、先ず押さえて置くべきポイントは、二

人の年齢差が少なくとも三十歳以上であったことで、庾信が北遷した四二歳のころ趙王は十歳位の少年であった。庾信の趙王への見方が示された詩に「上益州上柱国趙王」其一がある。

銅梁影棠樹 銅梁 棠樹に影じ

石鏡写褰帷 石鏡 褰帷を写す

両江如瀆錦 両江 瀆錦の如く

双峯似画眉 双峯 画眉に似たり

穿荷低晚蓋 穿荷 晚蓋を低れ

衰柳掛残糸 衰柳 残糸を掛く

風流盛儒雅 風流れて儒雅を盛んし

泉湧富文詞 泉湧いて文詞を富ます

無因同子淑 子淑に同じくするに因し無し

暫得待臨淄 暫く臨淄を待つを得ん

この詩の倪注は『周書』趙王伝の「保定中為柱国出為益州総管…」を引く。詩の前半四句は趙王の赴任先の益州の様子、蜀で趙王は善政を敷き、夫人もいて、景色の美しい所であろう、という。次の「穿荷：衰柳：」の二句は晩秋から冬の季節をいうと同時に庾信の趙王と離れていて寂しいという心象風景をも重ねた表現。次の二句は趙王の文学（詩）をいう。「風」は『詩経』の六義の一つ。儒雅は正しい儒学。なお『顔氏家訓』卷四文章に

夫文章者原出五経…歌詠賦頌生於詩也

「夫れ文章は原と五経に出づ…歌詠賦頌は詩より生ずるなり」

とある。泉湧は趙王の文学の才能をいう。魏・曹植の「王仲宣誄」に

文若春華、思若湧泉、發言可詠、下筆成篇

「文は春華の若く、思は湧泉の若し、言を発すれば詠ず可く、筆を下せば篇を成す」

とある。『詩経』の文学精神が流行して正しい儒学が盛んになり、その流れの中で趙王の思いは泉のように湧き出て豊かな表現の詩を作る、という。或は「風流」は『詩品』序に「太康中：風流未だ：」等の用例があり、風流と熟語に読み、風雅の伝統、文雅の精神の意味にも解せるが、対句の関係からとらない。次の二句は庾信が趙王の帰りを待っているという結び。ここで庾信は自分を子淑（魏の邯鄲淳の字）に譬え、趙王を臨淄（魏の曹植）に譬えている。邯鄲淳と曹植の関係は『三国志』魏書卷二一邯鄲淳の注に引く『魏略』に

博学有才章、：太祖素聞其名、召与相見、甚敬異之：会臨淄侯植亦求淳、太祖遣淳詣植、植初得淳甚喜：及暮淳帰对其所知歎植之材、謂之天人。

「博学にして才章有り：太祖素より其名を聞き、召して与に相い見え、甚だ敬して之を異とす：臨淄侯植に会い亦た淳を求む、太祖淳を遣りて植に詣らしむ、植初めて淳を得て甚だ喜ぶ：暮に及び淳帰り、其の知る所に対し植の材を歎じ、之を天人と謂う」

とある。邯鄲淳は太祖（曹操）からその才能を評価されていた人物だが、太祖から派遣されて、曹植に逢い、一日一緒にいて（：で省略した部分）曹植の文才・才能の多岐多様、深遠さの人並はずれて優れていることに驚嘆して「天人」だと言った、という。この比喻から、庾信が自分は趙王の父・北周の武帝から才能を認められ趙王のもとへ派遣された者で、趙王の才能を発見、評価し得る存在、と自負しているのが窺える。なお後半の四句から、趙王の文学を導く基本は儒教の經典でもある『詩経』に則るもので（北周・武帝の政策方針に適う）、趙王の

文才の優れていることは邯鄲淳が「天人」と称した魏の曹植のようだ、という庾信の趙王に対する態度、認識が窺えよう。これに類する趙王を曹植に比す表現は他にもあり、「北園新齋成応趙王教」詩は結びの所で、

…十八句省略…

若論曹子建 若し曹子建を論ずれば

天人本共知 天人本と共に知る

と使っている。省略した十八句は北園の新齋の描写とこの日の行事、遊びの様子。或は、趙王の夫人の墓誌銘「周趙国夫人紇豆陵氏墓誌銘」では

天和五年四月二十二日、薨於成都之錦城、春秋二十、…七年二月日、歸葬於長安之洪瀆原。詔贈趙国夫人、礼也。雲南去来、既留連於楚後、光陰離合、実惆悵於陳王

「天和五年四月二十二日、成都の錦城に薨る、春秋二十、…七年二月日、長安の洪瀆原に帰り葬せらる。詔して趙国夫人を贈る、礼なり。雲は南より去来し、既に楚に留連せし後、光陰離合し、実に陳王を惆悵せしむ」とあり、趙王を「陳王」と称している。倪注は「陳王、曹植也」というのみだが、曹植を陳王と称する先例は、沈約の「宋書謝靈運伝論」に「至于建安、曹氏基命、三祖陳王、咸蕃盛藻、」（「向曰：陳王謂武帝子植也」）とある。三祖は曹操、曹丕、曹叡。「光陰離合」の句は曹植の「洛神賦」の次の句を踏まえる。

於是洛靈感焉、徙倚傍徨、神光離合、乍陰乍陽

「是に於いて洛靈は焉に感じ、徙倚傍徨す、神光離合し、乍ち陰く乍ち陽かなり」

なお、天和の年号は六年まで、次の建徳も六年までなので「七年」の意味が不明なのだが建徳元年を言うのかも知れない。或はまた「奉報窮秋寄隱士」詩では

…十二句省略…

空枉平原騎 空しく平原の騎を枉げ

来過仲蔚廬 来りて仲蔚の廬を過ぎる

という。詩題に「以詩末二句解之当是報趙王也」の倪注がある。曹植は建安十六年、二十歳の時に平原侯（食邑五千戸）に封ぜられている。ただ詩中の「平原」の倪注は

平原謂趙王也、『史記』云趙有平原君、故以為比。

〔平原は趙王を謂うなり、『史記』に云う趙に平原君有り、故に以て比を為す〕

であり、不適切と思われる。むしろ晋の陸機が平原内史となっており、『詩品』上品の、陸機の項目にやはり其源出於陳思、才高辭贍、拳体華美。

〔其の源は陳思に出づ、才高く辭贍にして、拳体華美なり〕

とあるので、陸機に比したとも読めるが、曹植を平原と称する例は『詩品』序にもある。

降及建安、曹公父子、篤好斯文、平原兄弟、鬱為文棟…。

〔降りて建安に及び、曹公父子、篤く斯文を好む、平原兄弟、鬱として文棟為り…〕

平原兄弟は陸機・陸雲兄弟をいう場合もあるが、ここは平原侯曹植とその兄の曹丕を指す。これらのことから、庾信はやはり曹植の意味で平原を使ったと見ておく。仲蔚は後漢の隱者張仲蔚、ここでは庾信を比す。張仲蔚については『高士伝』に

平陵人、与同郡魏景卿俱修道德隱身不仕、明天官博物、善属詩賦、所処蓬蒿没人、閉門養生、不治荣名、時人莫識、唯劉龔知之

「平陵の人、同郡の魏景卿と俱に道徳を修め身を隠し仕えず、天官博物に明るく、善く詩賦を属す、処る所は蓬蒿人を没す、閉門養生し、栄名を治めず、時人識る莫く、唯だ劉龔のみ之を知る」

とある。張仲蔚と曹植（趙の平原君、平原内史の陸機とも）の関わりが不明なのだが、ここから庾信が北周の人に、特に趙王に対して自分がどのようなイメージの人物でありたいかを伝えようとする気持ちが窺えよう。張仲蔚伝の最後部分の、「時人莫識、唯劉龔知之」の張仲蔚の理解者は劉龔（未詳）だけだという所に、趙王に対する阿諛めいた趣も感じられるが、庾信の理解者は趙王だけだという思い、メッセージも読み取れる。二句の意味は、わざわざ趙王が庾信の家に立ち寄って下さったが、お会いできず残念でした（我が家は蓬蒿人を没す所で捜しにくいのです、或は閉門養生してまして…）。省略した十二句は隱者暮らしの様子と村の情景描写。

以上の例から、まず庾信は趙王を魏の曹植のようだと認識していた、更に言えば、こういった表現は趙王に曹植の文学、詩風を目指せ、という教唆になったのではないかと思われる。そこで次に趙王の文学・詩についての庾信の発言を検討する。「趙国公集序」に

…柱国趙国公發言為論、下筆成章、…文參曆象…、韻涉絲桐…、論其壯也…、語其細也…、昔者屈原宋玉、始於哀怨之深、蘇武李陵、生於別離之世、自魏建安之末、晋太康以来、雕虫篆刻、其体三变、人人自謂、握靈蛇之珠、抱荆山之玉矣、公斟酌雅頌、諧和律呂…

「…柱国趙国公は言を發すれば論を為し、筆を下せば章を成す、…文は曆象を參え、韻は絲桐を涉り、…論は其れ壯なり、…語は其れ細なり、…昔者、屈原・宋玉、哀怨の深きを始め、蘇武・李陵、別離の世に生きる、魏の建安の末自り、晋の太康以来、雕虫篆刻、其の体三変す、人人自ら謂へらく、靈蛇の珠を握れり、荆山の玉を抱けりと、公雅・頌を斟酌し、律呂に諧和す…」

とある。「発言為論、下筆成章」の句は、倪注は無いが『三国志』魏書の曹植伝に

陳思王植字子建、年十歳余、誦読詩論及辞賦数十万言。善属文。太祖嘗視其文、謂植曰、汝情人邪、植跪曰、言出為論、下筆成章、顧当面試、奈何情人。

〔陳思王植字は子建、年十歳余にして、詩・論及び辞賦数十万言を誦読し、善く文を属す。太祖嘗て其の文を視て、植に謂いて曰く、汝人を倩いしかと、植跪して曰す、言出づれば論を為し、筆を下せば章を成す、顧うに当に面試すべし、奈何ぞ人を倩わん〕

とある。曹植が年十歳余のころ、その文が余りに上手なので曹操に代作を頼んだのかと疑われ、咄嗟に答えた台詞である（なおこれは『詩経』小雅・都人士の「出言有章」句を踏まえる）。先に引用した曹植の「王仲宣誄」の「発言可詠、下筆成篇」も意識すると思われるが、ここは趙王が年十歳余のころ庾信と出会っているので、その頃から趙王は曹植のように聡明、利発で「文」も上手だった、という。次の「…文参曆象く語其細也…」は『趙国公集』の五言詩以外の作品について述べる。五言詩以外というのは『趙国公集』は失われていて、どのジャンルの作品が収載されていたか不明なのだが、次の「昔者屈原宋玉く抱荆山之玉矣」が『詩品』序の五言詩の歴史を述べる部分を借りて庾信の五言詩史観を述べていることによる。『詩品』序は次の如くである。

…楚詞曰名余曰正則、雖詩体未全、然是五言之濫觴也、逮漢李陵、始著五言之目矣…降及建安、曹公父子…、太康中、三張二陸両潘一左…、元嘉中、有謝靈運…、故知陳思為建安之傑…陸機為太康之英…謝客為元嘉之雄…斯皆五言之冠冕、文辞之命世。

「…楚詞に曰う、余に名づけて曰う正則と、詩体未だ全からずと雖も、然れども是れ五言の濫觴なり、漢の李陵に逮び、始めて五言の目を著す…、降りて建安に及び、曹公父子、太康中、三張二陸両潘一左…、元嘉中、

謝靈運有り…、故に知る、陳思は建安の傑為り…陸機は太康の英為り…謝客は元嘉の雄為り…斯れ皆五言の冠冕にして、文辞の命世なり」

『詩品』は五言詩は屈原から始まり、李陵を経て、建安、太康、元嘉のころに五言詩の冠冕が出現している、という発想である。庾信も屈原、李陵と始め「自魏建安之末、晋太康以来」といつてる。その間の「其体三変」の句は沈約「宋書謝靈運伝論」にあり、倪注もここを引く。

自漢至魏、四百余年、辞人才子、文体三変、相如…、二班…、子建・仲宣…独映当時。

「漢自り魏に至るまで、四百余年、辞人才子、文体三変す、相如…、二班…、子建・仲宣…独り当時に映ず」ただは沈約は「自漢至魏、四百余年」に「其体三変」というのであり、庾信は「自魏建安之末、晋太康以来」というのであるから、ここは『詩品』序によりながら「其体三変」の句だけを沈約から借りた、と見る（具体的に庾信が誰或はどの時代に於いて其体三変したというのかは不明）。次の「人人自謂、握靈蛇之珠、抱荆山之玉」の句は曹植の「与楊徳祖書」の「人人自謂、握靈蛇之珠、家家自謂、抱荆山之玉」の句をほぼそのまま踏襲したものの。「公斟酌雅頌諧和律呂」の句は、趙王の五言詩は『詩経』の精神を斟酌したもので、音律にも善く諧和しているという。雅頌は『詩経』の精神、律呂は音律、六律（陽に属す）と六呂（陰に属す）。律呂は沈約「宋書謝靈運伝論」に

夫五色相宣、八音協暢、由乎玄黄律呂、各適物宜。

「夫れ五色相い宣かにし、八音協暢するは、玄黄・律呂、各々物の宜しきに適うに由る」とある。なお、音律に適う作品として沈約はさらに曹植の「贈又丁儀王粲」詩を挙げる。

子建函京之作…正以音律、調韻、取高前式。

〔子建函京の作：正に音律を以て、韻を調し、高を前式に取る〕

これらのことから先に引いた「上益州上柱国趙王」の其一「風流盛儒雅泉湧富文詞」の句を再考すると、趙王の詩風は、『詩品』上品の曹植の条にいう

其源出於国風、骨気奇高、詞彩華茂。

〔其の源は国風に出づ、骨気は奇高、詞彩は華茂なり〕

を意識したものと頷けよう。国風は『詩経』の「風」。「富文詞」は更に『三国志』魏書の曹植の本伝の評語に「陳思文才富艶」「陳思の文才は富艶なり」とあるのを意識していると思われる。詩に対する「富艶」の評語は『詩品』序に

元嘉中、有謝靈運、才高詞盛、富艶難蹤。

〔元嘉中、謝靈運有り、才高く詞盛んにして、富艶蹤い難し〕

とある。謝靈運は『詩品』の上品に置かれ、

其源出於陳思。

〔其の源は陳思に出づ〕

とされる。庾信はこういった方向で趙王を導こうとしていたのではないか、と思われるのである。なお、趙王が新詩を庾信に示した時の庾信の手紙「謝趙王示新詩啓」がある。

：八体六文、足驚毫翰、四始六義、実動性靈、落落詞高、飄飄意遠、文異水而湧泉、筆非秋而垂露、藏之山巖、可使雲霧鬱起、濟之江浦、必当蛟龍繞船……

〔八体六文毫翰を驚かすに足り、四始六義、実に性靈を動かす、落落として詞高く、飄飄として意遠し、文は

水を異するも泉を湧かすごとく、筆は秋に非ずして露を垂らすごとし、之を山巖に藏せば、雲霧をして鬱として起らしむべく、之を江浦に済らせば、必ず当に蛟龍船を繞るべし……」

「八体六文、足驚毫翰」は趙王の字が上手なことをいう。八体六文は書道の字体。「四始六義、実動性靈」は趙王の詩は『詩経』の精神の発露で、たましいを感動させる、という。四始は『詩経』の風、大雅、小雅、頌（或はそれぞれの冒頭のある作品を指す）、六義は『詩経』の、風、雅、頌、賦、比、興。沈約「宋書謝靈運伝論」に夫志動於中、則歌詠外発、六義所因、四始攸繫……。

「夫れ志中に動けば、則ち歌詠は外に発す、六義の因る所、四始の繋る攸にして……」とある。性靈はたましい、心、精神。用例は多いが、例えば『南史』文学伝論に

自漢以来、辞人代有、大則憲章典誥、小則申抒性靈。

「漢自り以来、辞人代ごとくに有り、大は則ち典誥に憲章し、小は則ち性靈を申抒す」とある。落落は高く抜きん出るさま。倪注は無いが孫綽「天台山賦」に「蔭落落之長松」とある。「文異水而湧泉」の句も倪注は無いが、先にも引用した魏の曹植の「王仲宣誄」の「文若春華、思若湧泉」を意識する。「藏之山巖」も倪注は無いが、作品の散逸を恐れて山に保存する、転じてそれだけの価値がある著書・著作の意味。『史記』の太史公自序に「藏之名山、副在京師」、また司馬遷の「報任少卿書」に「僕誠以著此書、藏諸名山」とあり、曹植の「与楊徳祖書」に「……僕少小所著辞賦一通相与……雖未能藏之於名山……」等の用例がある。ただ、ここは趙王の新詩について言っているものであり、次の「済之江浦」、の句との兼ね合いからさらに、「藏之山巖、可使雲霧鬱起」の句は「朝雲暮雨」といった巫山の神女を詠じた宋玉の「高唐賦」を、「済之江浦、必当蛟龍繞船」は洛水の女神を詠じた曹植の「洛神賦」を意識して、趙王の新詩はこういった賦のもつ雰囲気がある、というと思われる。い

ずれにしても、庾信は趙王の詩は『詩経』の精神に則すもので、それは曹植の詩風、謝靈運にも通じ、更に韻律にも適ったもの、と見ていた、或はそういった詩風に導こうと方向づけしていた、と結論出来ると思われる。趙王の作品が無いので、実態は不明のままであるが、『周書』趙王伝の「学庾信体、詞多輕艷」の輕艷の語は『梁書』卷四簡文帝紀に

雅好題詩、其序曰、余七歳有詩癖、長而不倦、然傷於輕艷、当時号曰宮体：史臣曰：天才縱逸、冠於今古、文則時以輕華為累、君子所不取焉

とある。庾信は北遷後に詩風が変化しているが、在梁時代には簡文帝の東宮に出入りし、宮体或は徐庾体と称される詩風で一世を風靡したのであるから、その庾信の体を学んだ趙王の詩に輕艷（軽やかな美しさ）が多くても不思議ではない。輕艷の概念と庾信が趙王を比した曹植やその流れをくむ謝靈運の詩を評した富艷（豊かな美しさ）の概念とは必ずしも一致しないが、『周書』を撰した令狐德棻等の詩文の鑑定眼、鑑賞力も不明であるから、齟齬する訳でもない。趙王は本伝に抛れば著す所の文集は十卷、『隋書』卷三五経籍・四では「後周趙王集八卷」と伝えられ、また「幼くして聰穎、群書を博渉する」とあることから、利発で知的好奇心の旺盛な王子であったと推察されるので、仏教が趙王にとってその興味の全てだったとは考えにくいし、一で考察したように庾信は北周・武帝の政策に注意深く対応しているのであるから庾信が趙王に意図的に思想的なことを示唆したとも考えにくい。庾信の趙王の詩文に対する表現も庾信の立場、趙王との年齢差等を勘案して見れば、多分にお追従、遠慮、といった配慮は否定出来ないが、庾信は趙王に対して文学の臣下という立場で、趙王の文学は曹植のようだという基本的な認識を保持し表現し続けたのではないかと思われる。ただ、当然のことながら、庾信の「奉報趙王出師在道賜詩」詩の「王子身為宝、深思不倚衡」、「答趙王啓」の「風塵未尽、霜露霑衣、仰願珍宜、以為身宝」、

「奉和趙王途中五韻」の「錦城遙可望、廻鞍念此時」句等から、庾信が趙王に儀礼だけでない親近感、情愛を感じていたらしい事も十分に窺われる。

付記 本稿は『庾子山集注』（北周・庾信撰清・倪璠注、許逸民校点北京・中華書局出版一九八〇年）を底本として使用。

注

(1) 日本中国学会第五二回大会（平成十二年十月七日、於東京大学本郷キャンパス）で、安藤信廣氏の「庾信の文学的影響」と北周王族の仏教思想―聖武天皇宸翰『雜集』を資料として」という研究発表。なお本論には安藤信廣氏の発表のコメンテーターとして既に発言した部分もある。

(2) (1) の発表の後の質疑応答で、南朝仏教と北朝仏教とは本来異なる、という視点から、南朝人の庾信の仏教知識が北朝人に影響を与えるとは考えにくいとの発言があった。

(3) 拙書『庾信研究』（東京明治書院二〇〇〇年三月出版）の第二章第三節庾信の恥意識の背景（七九頁〜九三頁）。

(4) 『庾信研究』第四章第一節庾信の「対雨」詩の唐詩への影響（一九一頁〜一九七頁）

(5) 『隋書』卷三五経籍・五には「至周武帝時、蜀郡沙門衛元嵩上書、称僧徒猥濫、武帝出詔、一切廢毀」とある。

(6) 『庾信研究』第二章第三節庾信の恥意識の背景（八九頁）。